別紙２

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名　後藤絵美

後藤絵美氏の論文「「神のために」まとうヴェール ―― 現代エジプトのムハッジャバ増加現象と宗教言説の浸透」は，1980 年代から 2000 年代初めにかけて，エジプトのムスリム女性のあいだに急速に拡がったヴェール着用現象に着目し，アラビア語の文献資料・音声資料を駆使しつつ女性たち自身の言葉に寄り添いながら，この現象を取り巻く知的状況や背後にある思考様式を明らかにしようとした研究である。標題中の「神のために」とは，筆者が 2003 年から 05 年にかけてのエジプト長期滞在中，ヴェールをかぶる女性たちから直接聞いた，「(ある日突然) 神のことがたまらなく美しく思え，神のために何かしたいと思った。だからヴェールをかぶった」という言葉の一部から取られている。また，副題にある「ムハッジャバ」とは，ヴェール（アラビア語で「ヒジャーブ」）着用女性を意味する言葉である。

論文は「序」と「結語」を挟み，第一部「聖典とヴェール」，第二部「ヴェール着用を支えたもの」の二部，全五章から構成される。最初の「序」においては，ヴェール着用現象に関する欧米語・日本語による先行研究の論調とその問題点が明らかにされる。従来の議論によれば，ヴェール着用は 20 世紀後半の中東（とくにエジプト）が経験した社会・経済的な変化と，公的空間は男性に属するとする伝統的な考え方とのあいだで板挟みになった女性たちが，公的空間で自らの身体を象徴的に消去するために選択した方策ないしは戦略であったとされる。しかし筆者は，そこでヴェール着用に関わる思考様式の内実や背景，変容に関する考察が等閑に付され，女性自身の言葉の一部が捨象されてきたことを指摘する。従って本研究は，そうした空白部分を埋める試みとなることが予告される。

第一章「クルアーンとヴェール ―― 啓示の背景とその解釈」は，女性のヴェール着用の根拠とされる『コーラン（クルアーン)』の三つの章句を取り上げ，歴史書やハディース集（預言者の言行録の集成)，コーラン注釈書といったアラビア語一次史料を駆使しながら，これらの章句が啓示された背景や状況に関する伝承と，その意味の解釈とを検討する。その結果，啓示の背景については複数の伝承が併存したり，伝承自体が存在しなかったりして，確実な結論は導き出せないこと，初期イスラムから中世期まで，ヴェール（ヒジャーブ）の定義や，それが覆うべき範囲に関する解釈も，社会状況や個々人の判断でさまざまに揺れ動いていたことが示される。

第二章「現代エジプトとヒジャーブ ―― ヴェール着用の義務をめぐる議論とその宗教的根拠」では，啓示をめぐるそうした多様な解釈間の対立が現代の局面で顕在化した象徴的な出来事として，1994 年のエジプトの大衆的週刊誌『ルーズ・ユースフ』における「ヴェールはイスラムにおいて義務か否か」をめぐる論争が取り上げられる。ここでは，ヴェールは義務ではないとする法曹界の重鎮・アシュマーウィー（1932 年生）と，義務だとする聖法学者タンターウィー（1928-2010）が，同一の典拠に依拠しながら正反対の結論を導き出した。筆者は両者の主張の論拠の分析から，それぞれが恣意性を以て議論を展開していることを明らかにし，この状況では誰もが「権威ある典拠」を用いつつ，ヴェールはイスラムにおいて義務であるともないとも「正当に」主張しうると結論づける。

以上の第一部が，聖典とヴェールの関係をめぐる理論編であるのに対し，第二部は，1994 年の誌上論争以降，2000 年代前半までのエジプトで，「ヴェール着用は義務である」とする声が主流

になっていった現実に鑑み，その背景を明らかにしようとする現状分析編と言える。

第三章「ヒジャーブをまとうまで —— 宗教冊子と説教テープが伝えるヴェール着用の理由」は，1970 年代以降のエジプトで，民衆にイスラムの知識を伝える重要な媒体となった露店販売の宗教冊子や，説教師の宗教講話を録音したカセットテープなどから，女性のヴェール着用を促す内容の作品を取り上げ，その説明の背後にある論理や思想を分析する。ここで主として用いられるのは，2004 年出版の宗教冊子『ヒジャーブをめぐる対話』である。その結果，2000 年前後の宗教冊子や説教テープに通底する言説として，「女性のヴェール着用は神の命令であり，その義務を遵守する者は現世と来世で神の恩恵を受け，遵守しない者は不幸になる」という考え方が抽出される。

第四章「人気説教師とヒジャーブ —— ヴェールの流行と言説の変容」では，そうした言説の内部に生じた変容が分析される。筆者は，2000 年代前半に多くの女性にヴェール着用を決意させたとされる人気説教師アムル・ハーリド（1967 年生）の説教テープを取り上げ，従来の宗教冊子や説教では，ヴェールは男性が女性の誘惑（アラビア語の「フィトナ」）から社会を守るために女性にまとわせるものだったのに対し，ハーリドの説教では，ヴェールは女性自身が神への恥じらいの感情（アラビア語の「ハヤー」）から主体的にまとうべきものになっていることを指摘する。このように，女性に主体性を与え，信仰心とヴェールの繋がりを強調する言説が普及した結果，2000 年代にヴェール着用が急増したという可能性が提示される。

第五章「芸能人女性の「悔悛」とヒジャーブ —— ヴェール着用を支えた出来事と思想」は，2000 年代に顕著になった女性主体の言説が，実はそれ以前から受け継がれてきたことを明らかにしている。ここでは，1980 年代からヴェール着用を決意し，引退したり活動の場を変えたりした女優や歌手，ベリーダンサーら，「悔悛した芸能人女性」の語りが分析の対象となる。臨死体験や夢などの「出来事」を神の導きと捉え，ヴェール着用を決意したという彼女らの言葉の背後に，筆者は「真なる夢」や「崇拝」といった宗教思想の存在を見て取っている。

最後の「結語」では，以上の五章を回顧しつつ，ヴェール着用に関わる思考様式は不変でも自明でもなく，時代や社会とともに変化すること，現代エジプトにおけるヴェール着用の増加には，女性を主体とし，ヴェール着用を信仰心の指標とする言説の浸透があったことが再確認される。

こうした内容を持つ本論文の貢献としては，まず一次史料としてのアラビア語イスラム文献を幅広く実証的に精査した上で，ヴェールの定義や着用義務についてそれらから唯一の絶対的結論は導かれえず，むしろ多様な解釈が許されることを明確にした点が挙げられる。これは，ヴェールをめぐる従来の議論ではなされてこなかった重要な基礎的作業であり，その検証の手続きや結論についてはイスラム学の専門家からも高い評価が与えられた。

次に，従来の欧米を中心とするヴェール研究が政治的・社会的・経済的背景を重視したり，アンケート調査の結果を統計的に処理したりすることで，外側から「客観的」に分析しようとする傾向が強かったのに対し，本論文はそれらから抜け落ちてしまう女性たち自身の言葉を拾い上げ，その背後にある論理や思考回路を内側から辿り直した点も大きな貢献である。筆者がムスリム女性という「インサイダー」の立場に身を置き，「神のために」何かをしたいという彼女たちの自発的な感情がヴェール着用に結びつく知的状況や論理を，アラビア語の文字資料や音声資料に依拠しつつ明らかにしてゆく過程はきわめて斬新である。

最後に，同時代の社会を分析するさいに，大衆向けの冊子や口語の説教テープといった，従来の学術研究では軽視されがちだった媒体に着目し，それらを基礎資料として活用した点も大きな貢献として挙げておきたい。これは，地域研究ないしは宗教学研究における新しい地平を開く試

みとして評価できる。さらに，論文全体が明晰な達意の日本語で表現され，術語や固有名詞への説明注も叮嚀に付されて，研究成果を一般読者へ還元するための細やかな配慮がなされている点も特筆に値する。

勿論，きわめて優れた本論文にもいくつかの問題点がないわけではない。審査委員からは，例えば，インサイダーの視点を重視するあまり，政治的・経済的ないし歴史的背景への目配りがやや疎かになっている印象を与えかねないとの指摘がなされた。女性を主体とし，ヴェール着用を信仰の指標とする言説が近年になって急速に浸透したこと，あるいは，「崇拝」（アラビア語「イバーダ」）や神への愛といった超歴史的概念が，女性の自発的ヴェール着用の媒介項として突如機能し始めたことの歴史的背景は何だったのか。一旦インサイダーの視点に立ったのち，筆者が再度外側に出て，インサイダーの視点をアウトサイダーとして相対化する過程が十分明確に表現されていれば，論文の説得力はさらに増したであろう。また，分析対象が主に中産階級以上に限られることや，他のイスラム諸国と比べた場合のエジプトの独自性への言及がないこと，特定の説教師を取り上げたり，芸能人女性の語りによって一般女性の言葉を代表させたりするさいの選択の根拠が必ずしも十分には示されていないことなど，事例の代表性と特殊性に関する問題も指摘された。

しかし，これらの多くは本論文の設定する枠組みを超えた，今後の課題と言うべき指摘であり，研究自体の価値を減ずるものではない。よって審査委員会は，本論文が博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。